

PHILOMUSICA ORCHESTER KYOTO



ROTT



HANDEL



MENDELSSOHN

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第25回目となりました。今回の演奏会は指揮者に第1回定期演奏会でメンデルスゾーン作曲、交響曲第3番「スコットランド」を指揮していただいた、滝本秀信氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、魅力あふれる交響曲を、披露してくれるものと期待致しております。

本日の聴き所は1877年4月にHans Rott (Roth) ハンス・ロット (ロート) が書き上げました、「ユリウス・カエサル (ジュリアス・シーザー)」前奏曲です。

ちなみにロットはオーストリア・ウィーン生まれの後期ロマン派 (ブルックナー、マーラー等) の作曲家でオルガニストでもありますし、近年ロットの作品が再評価され、第18回定期演奏会に於いても金 正奉氏の指揮で交響曲第1番ホ長調が演奏されております。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

ある有名なチェリストが来日し、日本のオーケストラと演奏旅行をしました。演目は定番のチェロ協奏曲で、各地で絶賛を博していました。オーケストラの団員はソリストに随行するので同じ演目を何度も聴くわけですが、ある奏者が次のようなことを言っています。「彼は演奏会のたびにアンコールで同じ曲を演奏するが、どの演奏もひとつとして同じものがない。どれもちがっていて、どれもいい。これが本当の一流奏者だ」と。

これでいいだろうと自分が思ってしまったら、そこで芸は止まるといいます。芸術に上限はないのです。私たちも現状に満足せず常に高みを求め、より良い演奏を聴いていただけるよう日々取り組んでいます。きょうの演奏も最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- ・携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。
- ・演奏中の私語は固くお断りいたします。
- ・客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- ・補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- ・演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- ・咳払いもできるかぎりお控えください。どうしてもこらえられない場合はハンカチやタオルで口をおおうよう、周囲のお客様へのご配慮をお願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。

京都芸術センター制作支援事業

京都フィロムジカ管弦楽団 第25回定期演奏会

2009年6月7日(日) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館

1:15～ ロビーコンサート

♪ 曲目 ♪

ロット/『ユリウス・カエサル』への前奏曲(日本初演)

Hans ROTT(1858-1884): Ein Vorspiel zu „Julius Cäsar“

ヘンデル(ハーティ編曲)/組曲『水上の音楽』

George Frideric HANDEL(1685-1759)/Hamilton HARTY(1879-1941): Water Music Suite

I. Allegro II. Air III. Bouree IV. Horn-Pipe V. Andante espressivo VI. Allegro deciso

— 休憩 —

メンデルスゾーン/交響曲第3番 イ短調 作品56

Felix MENDELSSOHN Bartholdy(1809-1847): Sinfonia 3 a-moll, Op.56

I. Introduction und Allegro agitato;

II. Scherzo assai vivace;

III. Adagio cantabile;

IV. Allegro guerriero und Finale maestoso.

指揮 滝本 秀信

♪ ロビーコンサート ♪

ビゼー(David Walter 編曲)/『カルメン』よりアラゴネーズ～ハバネラ～セギディーリア～トレアドール

Fl.: 江藤 Ob.: 石原 Cl.: 田中慎一郎 Fg.: 常見 Hr.: 坂口

時は1830年頃のスペイン、セビリア。恋は野の鳥、誰も手なずけることはできないのよ・・・(ハバネラより)

自由を愛するジプシーの女、カルメン。そんなカルメンが歌うアリア(ハバネラ・セギディーリア)を中心に今日はお楽しみください。(江藤)

メンデルスゾーン/弦楽四重奏曲第2番より第1楽章

Vn.: 田原 Vn.: 西村せり花 Va.: A.BANDE Vc.: 波多野

メンデルスゾーンはバッハやベートーベンなどの偉大な作曲家をととても尊敬し、影響を受けていたそうです。この曲もベートーベンのイ短調四重奏曲をモデルにしたとかしないとか。若い頃に書いた曲らしいので、曲に負けないよう若々しく勢いのよい演奏をお届けしていきたいと思います。(波多野)

ベートーベン/七重奏より第1楽章

Vn.: 田原 Va.: 田中邦人 Vc.: 多田 Cb.: 小道 Cl.: 安達 Fg.: 石塚 Hr.: 草木

ベートーベンの室内楽曲の中では割とよく知られた作品です。オーケストラに比べればとても小さな編成ですが、時折シンフォニーに負けない迫力を感じる部分があります。そのあたりをお楽しみ頂ければと思います。(田原)

指揮者

滝本 秀信 (たきもと ひでのぶ)



指揮を汐澤安彦氏に学び、JBA日本吹奏楽指導者協会認定指導者として活動をするかたわら、指揮法を伊吹新一、編曲・和声学を櫛田肤之扶の各氏に師事。95年より国外においてオーケストラ指揮の研鑽を積み、クルト・レーデル（イタリア・レスピーギ音楽院）、リヒャルト・エデリンガー（ウィーン国立音楽大学）、アレクサンドル・ヴェデルニコフ、レオニード・ニコラエフ、イーゴル・シュテッグマン（モスクワ国立音楽院）、アレキサンドル・カントロフ（サンクトペテル

ブルク・バレエ・シアター）各氏に師事。

ロシアへは度々渡り、リムスキー=コルサコフ作曲『交響組曲シェヘラザード』チャイコフスキー作曲『交響曲第5番』他を次々に指揮し好評を博す。また、『ナタリー・ショケット・オペラ・コンサート』京都公演、京響特別演奏会・大友直人指揮フォーレ作曲『レクイエム』、京響460回定期演奏会・同氏指揮ベートーベン作曲『交響曲第9番』等の合唱指揮、バレエ専門オーケストラ・ウィングフィルハーモニー管弦楽団音楽監督として、横須賀芸術劇場における伊与田バレエスタジオ『白鳥の湖』全幕公演、アミ・ドゥ・バレエ『くるみ割り人形』『パキータ』『コッペリア』全幕公演他を指揮。本場ロシアにおいてもサンクトペテルブルク・バレエ・シアター『白鳥の湖』全幕を成功に収め絶賛を受ける。堺フィルハーモニー交響楽団と取り組んだ“モダンダンス&クラシック音楽”という異色のコラボレーションも話題を呼んだ。

07年ブルガリア・ブラツァ・フィルハーモニー・オーケストラを客演指揮。ドボルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」及び同「チェロ協奏曲」をアナトーリ・クラステフ氏と共演し、スタンディングオベーションによる絶賛を受ける。08年チェコにおいても西ボヘミア交響楽団を客演指揮する等、意欲的に活動をしている。

これまでに、ウクライナ国立フィルハーモニー、ロシア国立サンクトペテルブルク・シンフォニー・オーケストラ“クラシカ”、同市オーケストラ・ザゼルカーリ、ブルガリア国立ブラツァ・フィルハーモニー・オーケストラ、チェコ共和国西ボヘミア交響楽団、京都フィロムジカ管弦楽団、ウィングフィルハーモニー管弦楽団、堺フィルハーモニー交響楽団、福井大学交響楽団、大阪市立大学交響楽団、京響市民合唱団、京都吹奏楽団、阪急百貨店吹奏楽団他、数多くの管弦楽団・吹奏楽団・合唱団の指揮をする。

曲目解説

ロット／『ユリウス・カエサル』への前奏曲（日本初演）

独創的な選曲を身上としているフィロムジカの歴史の中でも、僕がとりわけ誇らしく思っている業績の一つが、18 回定期（2005 年）でのハンス・ロット作曲『交響曲』の関西初演だ。その当時は、日本フィルによる日本初演からまだ間もない頃で、もちろんアマチュア日本初演。インターネット上では我々の取り組みを「アジア再演」と賛美してくれる人さえいた。新日本フィルや大阪シンフォニカーによる再演は我々の演奏の後の出来事だ。大阪シンフォニカーの演奏に関しては、一部評論家が「演奏はともかく曲の出来が悪い」という意味の文を書いていたが、聴き慣れない音楽を理解できない無能な評論家が自己を正当化するために書いた出鱈目な論評だと断言する。こうした凡庸な評論家を置き去りにして、ロットの作品は鋭敏な音楽愛好者の耳を確実に虜にしており、わずかずつではあるが着実に普及している。交響曲の演奏に関して言えば、昨年は大阪府立大学管弦楽団がアマチュア指揮者による日本初演という偉業を敢行し、さらに今年 8 月には福岡で九州初演がなされる。

そして今、僕たちは再びロット演奏史に名を刻む。寡作のロットが残した希少な管弦楽作品の一つ、『ユリウス・カエサル』前奏曲を日本初演するのだ。

ここでハンス・ロットの生涯を振り返っておこう。1858 年ウィーン生まれ。ウィーン音楽院でブルックナーらに師事する。その生活は貧しく、教会でオルガニストをして生計を立てていた。そのため、やはりオルガニストであった師のブルックナーと同様、オルガンを思わせる分厚い響きやコラル（賛美歌）風の旋律の多用が特徴的である。ブルックナー以外の教師たちからすこぶる評判が悪かったロットは、1880 年に『交響曲』を完成させると、その楽譜を音楽界の実力者・ブラームスに見せ、評価を得ようと試みる。しかし楽譜を見たブラームスは、この作品が盗作であるとの疑念を伝え、ロットを拒絶した。ロットはこのショックで発狂、何度か自殺未遂を繰り返した後、1884 年に 25 歳の若さで死亡した。なお僕は、若いロットの恐るべき才能に嫉妬したブラームスが意図的にロットをつぶしたのだと考えている。その証拠に、ブラームスがロットの楽譜を見た後に書いた第 3 交響曲（1883 年完成・初演）の終結部で、ブラームスはロットのアイディアを「盗用」したのだ。ブラームスの第 3 交響曲の最後は、第 1 楽章の第 1 主題が細かく分解されてこだまのように消えてゆき静かに閉じられるが、このような終わり方はロットが『交響曲』において既に実践しているのだ。また、ロットの友人だったマーラーは、自身の交響曲にロットの交響曲の要素を数多く引用している。つまり、ロットがいなければブラームスやマーラーの名作は生まれなかったのだ。このようにロットは、音楽史に計り知れない影響を残したのにもかかわらず、自身の音楽は生前に全く評価されなかったという悲劇の芸術家だ。

本日演奏する『ユリウス・カエサル』前奏曲（Ein Vorspiel zu „Julius Cäsar“）は交響曲の作曲よりも若干早い 19 歳のときの作品だが、早熟の天才ロットにとっては円熟期の作品と言って良い。題名からして、古代ローマの英雄ユリウス・カエサル（年配の方々には英語読みの「ジュリアス・シーザー」の方が馴染み深いかもしれない）を描いた楽劇の前奏曲として作曲されたものと推定されるが、ロットが実際に楽劇の構想を持っていたのかどうか、明らかではない。ウィーンでも上演されたシェークスピアの舞台『ジュリアス・シーザー』が契機だとする説がある（ちなみに、ロットの父親は舞台役者だった）。ただし、ロットのこの曲を聴く限り、シェークスピアの原作をこの曲のテキストに想定していたとは考えがたい。また、カエサルを主人公にしたオペラにはヘンデルの『ジュリオ・チェザーレ』があるが、このヘンデル作品の影響を受けた可能性も考えられない。シェークスピアの作品は、実質的な主人公はカエサル暗殺の中心人物ブルートゥスであり、高潔の士ブルートゥスがカエサル暗殺を決断するまでの逡巡や、暗殺成功ののち不毛の内輪もめを経て敗死するまでを、煽動に乗せられやすい民衆の愚かな様をまじえて描いた、風刺の効いた悲劇である。一方ヘンデルのオペラは、実質的な主人公はエジプトの女王クレオパトラで、彼女がカエサルの協力を得て不仲の兄王を駆逐しエジプトの実権を握るところで華麗に終わる。ロットのカエサル前奏曲は、このいずれの雰囲気とも異なるものである。おそらくロットは、英雄カエサルの生涯を描こうとしたのではない。

ここで、カエサルの生涯を振り返っておこう。ガイウス・ユリウス・カエサルは紀元前1世紀のローマの政治家・武将で、北はブリテン島から南はアフリカにまで至る広大な範囲で侵略戦争を展開。奪った土地から得られる収入を基盤にしてローマにおける政治的地位を確かなものにしていき、政敵を武力で破って独裁的地位を手にする。このように、戦争によって権力を確立したカエサルではあるが、決して連戦連勝というわけではなく、むしろ敗戦も多くカエサル自身何度も死の危険を味わった。しかし、果敢な決断力と迅速な行動、そして持ち前の楽観的発想によってそのつど逆転勝利をものにする。加えて、名門の出ではなく身体的にも病弱というハンディにもかかわらず不断の努力と工夫によって成功を手にしたことや、絶世の美女と謳われたエジプト女王クレオパトラとのメロドラマなど、大衆受けする逸話にも事欠かない。ブルートゥスをはじめとするかつての政敵をも味方として受け入れる慈悲深さや、戦争で得た巨万の富のほとんどを兵士や市民にふるまった気前の良さでも知られた。しかし最後は、カエサルへのあまりの権力の集中を警戒したブルートゥスら貴族たちのクーデターが起き、惨殺される。享年56歳。この2000年以上前のカエサル業績は、実は現代にも引き継がれている。現在使われている暦（グレゴリオ暦）はカエサルが制定したユリウス暦を改良したものであり、July（7月）はカエサルの姓（Julius）にちなむ語だ。『ガリア戦記』など今に読み継がれる名著も残した。「賽は投げられた」「ルビコン川を渡る」「（ブルートゥス、）お前もか！」などの日常的に使用される慣用句もカエサルを由来とするものだ。カエサルは疑いなく人類史上最も著名な人物のうちの一人であろう。

ロットのカエサル前奏曲は、こうしたカエサルを描くのにふさわしい、覇気に満ちたスケールの大きな合奏によって輝かしく始まる。束の間の平和を享受するかのような静謐さ、戦争を描いているとも考えられる苛烈さなど、短い曲の中で音楽の様相はめまぐるしく変化するが、常に一貫しているのは楽天的な明るさである。カエサルはどんなに絶望的な状況になったとしても、運命の女神は必ず自分に味方する、と自分に言い聞かせて状況を打開していったという。そうした前向きな力強さが、この音楽の全編にみなぎっている。しかし、曲の終盤になって初めて絶望的な悲壮感が前面に出る。ヴァイオリンとトランペットが悲痛な声で泣き叫ぶと、薄い編成のオーケストラがまるで混濁していく意識のように崩れていき、心臓の最後の一打ちのような重々しいピッツィカートによって曲が締めくくられる。

このような曲相からは、ロットが描こうとしたのが、カエサルの波乱に満ちた生涯と、意気盛んな彼の生き様と、そしてその非業の最期だったのだろうと想像される。この前奏曲の後にどのような楽劇を展開させようとしたのか、今となっては知る由もないが、この前奏曲だけでも単独の曲として充分聴き応えがあるので、カエサルを描いた演奏会用序曲として完結させるつもりだったとしても不思議ではない。さらに想像を逞しくすれば、ロットがカエサル的な生き様に憧れていたとも思われる。ほぼすべての音符にアクセントをつけた強面の旋律、*ffff*から *pppp* までの強弱を指定した振幅の激しい表情、事細かに指定されたテンポ変化、頻出する「Mit aller Kraft = 全力で演奏しなさい」の指示。こうしたロットの譜面からは、微細な妥協も許さずに理想の音楽を追求する激烈な青年作曲家の姿が浮かんでくる。自身の理想と野望のために妥協することなく突き進んだ猛者カエサルの姿と重なって見える。しかし皮肉なことに、能力の絶頂期に非業の最期を迎えるというところまでもロットとカエサルは重なってしまったのだ。

参考文献：ヴァイグレ指揮のCD（ARTE NOVA）のライナーノーツ

（曲目推薦者 Tp. 遠藤 啓輔）

ヘンデル（ハーティ編曲）／組曲「水上の音楽」

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（1685-1759）はドイツ生まれでイギリスに帰化した作曲家で、音楽の母とも呼ばれており「ハレルヤコーラス」といえばご存知の方も多いただろう。この水上の音楽も彼の代表作で、バロック音楽の雰囲気はきょうはハーティ編曲版でしばしお楽しみいただきたい。

この水上の音楽成立には逸話（事実かどうか不明）があるので紹介しよう。ヘンデルはドイツでハノーファー

選帝侯の宮廷楽長をしていたが、旅行先で行ったイギリスでアン王女に気に入られ、イギリスに居すわってしまった。再三の帰国命令を無視していたところ、アン王女が急死、こともあろうに元上司のハノーファー侯がイギリス国王として迎えられることになった。あわてたヘンデルは元上司の機嫌をとるため、テムズ河上でにぎやかな曲を演奏し仲直りをした、これが水上の音楽であるという話である。現代に置きかえれば、東京本社の社員が部長命令で北海道支店に配属され、そこが気に入ったからといって居すわり続けたら、その部長が北海道の支店長として来ることになった、というようなものだ。会社ではよくある妙な再会だが、昔のことは水に流してこれでまたかわいがってほしい、と思う部下の気持ちは古今東西変わりなさそうだ。

第1曲：Allegro

ホルンと弦の掛け合いで始まる豪華なオープニング。日本の舟遊びで登場する屋形船とはちょっと趣が異なるかもしれない（3分）。

第2曲：Air

水上の音楽はヘンデルのオリジナルで演奏すると全部で25曲、1時間近くかかる。ハーティはこの中から、おいしいところをつまんで演奏会用に6曲の組曲に仕上げた。第2曲は舟に揺られていい気分（7分）。

第3曲：Bouree

弦楽器のみによる舞曲。切れ目なく第4曲に続く（1分）。

第4曲：Horn-Pipe

木管4本の組と、弦+ピッコロ・フルートの組が交互に演奏する楽しい取り合わせ（1分）。

第5曲：Andante espressivo

フルートの甘い旋律が印象的。ハーティは原曲の良さを生かしながら上手に旋律を各楽器に振っている（5分）。

第6曲：Allegro deciso

華麗なフィナーレ。ヘンデルに特徴的な明るさ、豪華さが十分に発揮された開放的な曲。ここではトランペットも加わり、華々しく締めくくる（4分）。

（曲目推薦者 Hrn. 長岡 武志）

メンデルスゾーン／交響曲第3番 イ短調 作品56

『スコットランド』の愛称で知られるこの曲は、フィロムジカの第1回定期（1996年）で、本日と同じ滝本秀信氏の指揮で演奏した曲だ。といっても第1回定期から継続して在籍している団員は4人になってしまったし、第1回も今回もメンデルスゾーンに出演するのは僕一人しかいないから、「団員みんなが創立当時の熱気を思い出して演奏する云々」といったことはありえない。しかし、因襲にとらわれず攻撃性を前面に出した第1回定期でのメンデルスゾーンの演奏が、今日のフィロムジカのカラーとして受け継がれていることは疑いない。

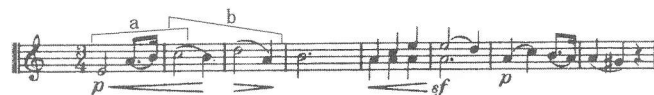
さて、第1回定期から本日までの間に、この曲に関して大きな出来事があった。星野宏美博士の大著、その名もズバリ『メンデルスゾーンのスコットランド交響曲』が2003年に出版されたのだ（音楽之友社）。知名度の高さのわりに本格的な評伝のなかったメンデルスゾーンを知るのに格好の書であり、「交響曲第3番『スコットランド』は着想から完成まで14年もかかった」「メンデルスゾーンの交響曲の番号は出版順なので作曲した順番とは食い違う」など、既に知られているメンデルスゾーンに関する豆知識的な情報の裏には実に意味深い事情があることを明らかにし、そのうえでこの第3交響曲がメンデルスゾーンにとって如何に重要な作品であるかが明らかにされる。

例えば、交響曲の番号の問題が実は極めて重要な意味を持つことが明らかにされる。自分の作品を常に厳しく吟味し改訂に改訂を重ねたメンデルスゾーンにとって<楽譜出版>こそが作品の最終的な完成といえるが、5曲ある交響曲のうちメンデルスゾーンが生前に出版したのは第3番までであり、人気作『イタリア交響曲』も最近演奏機会が増えている『宗教改革交響曲』も（いずれも『スコットランド交響曲』より前に初演）、作曲者自身が

失敗作と見做して出版しなかったというのだ(この2曲は「第4番」「第5番」として作曲者の死後に出版される)。そして、第1交響曲は出版されたとはいえ作曲者が少年時代に書いた習作であり、また、声楽を伴う第2番『賛歌』は通常の交響曲とは異質な形式であることから、第3番『スコットランド交響曲』こそが作曲者もその価値を認めたメンデルスゾーン唯一の交響曲と言える、と、この曲の価値を再評価する。

また、星野博士は第3交響曲の着想から完成までの14年の歳月(メンデルスゾーン38年の生涯の実に3分の1以上を占める!)を追跡し、この曲の作成過程で何が障害となり、作曲者がそれをどう克服したかを考察する。メンデルスゾーンは20歳のとき、スコットランドを旅行中にこの曲の冒頭部分の着想を得る。ベルリン屈指の知的な家庭で育ち、文学の素養も豊かだったメンデルスゾーンは、スコットランドに伝わる古謡やスコットランドを舞台にした小説を通して、美しくも厳しい自然の中に歴史が息づくこの地に思いを馳せ、現地を訪れる。そして、7月30日の夕方、エディンバラにあるホルルード宮殿で交響曲の冒頭部分をスケッチしたのである(譜例1)。草原の中に、半分崩壊したまま残された、暗く残忍な権力闘争の歴史を刻む宮殿。この情景が呼び起こした音楽は、長調とも短調ともつかない空虚な響きを漂わせる物悲しく素朴な民謡風の旋律だった。この、器乐的というよりは歌謡的な冒頭主題から、器楽作品の最高峰と言うべき交響曲を紡ぎ出すことができず、メンデルスゾーンは苦勞する。また、名門ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者に就任して同時代作品をも多数指揮していたメンデルスゾーンは、凡百の作曲家が書くようなベートーベンの亜流でしかない駄作交響曲は書くまいと、一層自己を厳しく律した。そして、14年もの間、他の作品の作曲(およびその改訂作業)を通して、各楽章の主要主題を関連付け全曲に統一感を持たせるという作曲技法を確立する。そうして完成されたこの交響曲は、ホルルード宮殿で着想した物悲しい歌を長大な序奏部とし、そこから動的な主題が派生して伝統的な交響曲の4つの楽章——第1楽章、スケルツォ楽章、アダージョ楽章、終楽章——を展開させ、最後は序奏の歌謡主題が明るく輝かしい響きに変貌して(譜例6)長大なコーダを形成する、という破格の大作となった。そして、おのおのの楽章の主題は冒頭の序奏部と関連を持ち、曲全体が有機的に結合した傑作となったのである。下に主題の一部を譜例で示しておいたが、それぞれの主題が関連を持っているのがお解かりいただけると思う。

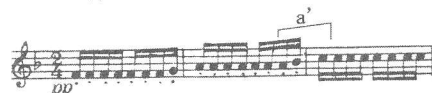
譜例1 第1楽章 冒頭



譜例2 第1楽章 主要主題



譜例3 第2楽章 冒頭



譜例4 第3楽章 主要主題



譜例5 第4楽章 主要主題



譜例6 第4楽章 コーダ



なお、メンデルスゾーンが家族宛に書いた手紙などから、スコットランド旅行中に着想を得たという曲の成立過程が明らかになり、今では『スコットランド交響曲』の愛称が定着している。ところが、作曲者自身はタイトルからの連想で交響曲を聴かれることを嫌ったため、愛称をつけなかったのはもちろんのこと、曲の成立過程さえ生前は明らかにしなかった。そして、驚くべきことに同時代の作曲家シューマンはこの交響曲第3番をメンデルスゾーンがイタリアを旅行中に着想した作品と考えていたというのだ(当時はまだ『イタリア交響曲』はドイツで初演されていなかった)。曲目解説を書いているながらこんなことを結論付けるのは自己矛盾めいているが、結局音楽を楽しむのには一番大切なことは音それ自体を真摯に聴くことだといえよう。この曲を聴きながら目の前に

スコットランドの風景を連想しなければいけないということは全く無いし、各人各様の楽しみ方ができればそれでよい。ただ、この曲の着想の背景に、夕映えの中に寂しく佇む宮殿を見て歴史へと思いを馳せるメンデルスゾーンの深い洞察があったことを知っておくのは決して無駄ではないと思う。

第1楽章

ヴァイオリンなど高音域の楽器を排除した渋い響きで、物悲しい歌謡風の旋律をゆったりと演奏して曲が始まる（譜例1）。長大なこの序奏を経て、疾走するような主部に至るが（譜例2）、冒頭の物悲しい雰囲気は楽章のあいだじゅう持続される。クライマックスはティンパニが轟き弦楽器が疾風の如く吹き抜ける嵐のような音楽になる。ここでは、管楽器のディミヌエンドと弦楽器のクレッシェンドが同時におこなわれるという、当時としては斬新な表現がなされる（譜例7）。最後は冒頭の歌謡主題が再現され、名残惜しげに閉じられる。

譜例7



第2楽章（スケルツォ）

第1楽章とは打って変わって健康的な明るさに満ちた音楽になる。弦楽器の刻みが爽やかな空気を運び（譜例3）、曙光が射すように管楽器が鳴らされると、木管や弦楽器で軽快な旋律が歌い継がれ、やがて爆発的な明るさとなる（この部分を聴くと、シューマンがこの曲をイタリアで着想した曲と思っても不思議がないと感じる）。ただ、途中に挿入されたバロック舞曲風の音楽はどこか暗い胸騒ぎを感じさせる。貴族たちの、華やかな生活の裏に隠された陰惨な権力闘争を連想させるからだろうか。

第3楽章（アダージョ・カンタービレ）

第1主題は弦楽器の艶やかな音色を主体とした、穏やかでゆったりとした歌（譜例4）。これに対して第2主題は木管とホルンのほの暗い響きを主体とした峻厳とした音楽である。クライマックスはこの第2主題が慟哭のように激しく鳴らされるが、最後は第1主題が回帰して心地良く瞑想的に閉じられる。

第4楽章

前楽章の心地良いまどろみをぶち壊すように、闘争的な音楽が襲い掛かってくる。進軍のようなホルンの伴奏に乗ってヴァイオリンが切り刻むように演奏する（譜例5）。途中、雲間から光が射すような明るい旋律も聞かれるがそれも束の間、クライマックスでは低弦が地を這う大蛇のようにうねる中、楽章冒頭の攻撃的な音型が次々と襲い掛かってくる。戦いに疲れ果てたように音楽が沈滞するが、突如として生命力を取り戻し、長大で感動的なコーダに入る（譜例6）。全曲の冒頭の歌謡主題が源流であるが、冒頭で感じさせた物悲しさや空虚な雰囲気が後退し、荒々しく野太い力強さが前面に出て、堂々たる全曲の終結を迎える。

なお、各楽章を続けて演奏するように、という指示があるが、だからといってこの曲を単一楽章の作品のようにとらえる必要はない。作曲当時は楽章間に拍手する習慣があり、ときに全曲の演奏が終わっていないのに人気楽章をアンコール演奏することさえあったということであり、こうした時代背景を考慮する必要がある。全曲の統一感・有機的結合を実現することに腐心したメンデルスゾーンは、楽章間の拍手によってその統一感が失われるのを嫌っただけなのだ。したがって、現代のように楽章間も拍手をせず静かに待つということが常識となっていれば、メンデルスゾーンはわざわざこのような指示を書くことはなかったであろう。

(Tp.遠藤 啓輔)

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

渡辺 真人様	鎗本 和弘様	大八木 文人様
渡辺 和美様	谷口 佳隆様	吉原 和敏様
松村 里香様	岡本 幸雄様	大内 きく彖様
渡辺 一真様	信広 澄子様	岡島 敦子様
渡辺 由加理様	横田 洋子様	小松 朋美様
渡辺 晴菜様	吉田 育弘様	鈴木 一俊様
杉本 幸子様	孝本 浩基様	谷村 暉様
安藤 美知穂様	吉田 寛子様	松田 太加志様
稲村 董雄様	木下 清美様	辻 良治様
遠藤 時金様	西坂 壽美子様	
井谷 宏美様	松浦 淳司様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(5月現在)

ご旅行は日本教育旅行で！！

各種旅行会社（JTB・日本旅行 etc）国内・海外
パンフレット取扱い可能！！
他にもスポーツ・音楽合宿、スキー旅行、団体旅行も
取り扱っております。

日本教育旅行株式会社

京都市下京区下数珠屋町通東洞院東入

TEL : 075-351-0405

<http://www.net.freeway.com>

担当 藤田 珠里

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727 (代)

FAX (075) 256-4604

—Column—

選曲していたときには気付かなかったのですが、今年
はメンデルスゾーンの生誕200周年にあたるそ
うです。そのため、今年は多くのオーケストラ・演奏
家がメンデルスゾーン作品の演奏を予定しています。

皆さんがもし、本日の私たちの演奏でメンデルスゾ
ーンに興味を持たれましたら、そうしたメンデルスゾ
ーンを演奏するコンサートに足をお運びいただき、彼
の様々な作品を聴いていただきたいと思います。

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Konzertmeisterin

田原 靖子

Violine

小幡 拓也
 澤田 菜摘
 田原 靖子
 西村 せり花
 山口 陽平
 飯田 俊也※
 池田 純子※
 井村 有里※
 上菌 未織※
 上山 瑞穂※
 大浦 一馬※
 大橋 世里佳※
 木村 誠志※
 新庄 元子※
 住吉 光恵※
 中野 大輔※
 西邨 奈穂※
 増岡 昌幸※
 向井 清史※
 森園 博章※

Bratsche

ANNIKA BANDE
 田中 邦人
 河井 奈美※
 黒沢 優子※
 牧野 貴佐栄※
 松浦 淳司※
 丸山 圭一※
 森 静香※
 森川 聖子※
 山本 亮太※
 吉川 昌毅※

Violoncell

小林 豪
 多田 進
 波多野 文
 館 雅洋※
 塚田 毅※
 本田 哲郎※
 室野 拓※
 綿引 聡史※

Kontrabaß

小道 信孝
 茂原 尚樹
 鳥山 拓
 丸山 拓史※

Flöte

江藤 佳美
 山口 明子

Oboe

石原 才子
 須貝 絵里
 西坂 加奈

Klarinette

安達 真未
 上高原 千寿子
 田中 慎一郎
 南井 菜穂子

Fagott

石塚 有里子
 常見 英加

Horn

芦原 俊平
 片山 真吾
 草木 美佐子
 黒田 直樹 JAMES
 坂口 裕志
 長岡 武志
 野田 啓
 吉野 文彦

Trompete

遠藤 啓輔
 竹内 恵理
 中西 美智子
 山口 鮎美※

Posaune

荒木 裕佳※
 河原田 佑美※
 前川 博志※

Tuba

中塚 隆介※

Pauken

岸田 麗※

※：客演奏者

顧問

和田 之宏

団長

長岡 武志

事務局長

西村 浩

弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第26回定期演奏会♪

2009年12月6日 京都府長岡京記念文化会館

諸井 三郎/小交響曲 ―こどものための―

ブルックナー/交響曲第7番 (予定)

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円 【期間】 ご入会いただいた月より1年間

- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
 2. その他演奏活動のご案内
 3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophilo.com

♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿各府県や三重県に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。

第28回定期演奏会(2010年12月頃)では、大曲のブルックナー交響曲第8番(初稿)の演奏を目指しています。

「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

●募集パート ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス (弦楽器急募！！)

ピッコロ・オーボエ・ファゴット・トロンボーン・打楽器

※ピッコロはフルート兼務。トロンボーンはテナー、バスともに募集中。

※管楽器・打楽器はオーディションを行っております。

※コントラバスは団所有の楽器があります。楽器運搬に不安がある方はご相談ください。

〔練習日時〕 毎週日曜日 午後1時～午後5時 春と秋に2泊3日の練習合宿(大津市内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、および河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所

〔諸費用〕 活動費：3,000円/月 合宿費：15,000円程度 演奏会参加費：20,000～30,000円(学生は半額)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: recruit@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ <http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。

訂正をお願いいたします

パンフレット・リーフレットの訂正

ハンス・ロット作曲 『ユリウス・カエサル（ジュリアス・シーザー）』への前奏曲
の本日の演奏を、「日本初演」としておりましたが、

東京アカデミッシェカペレ 第32回演奏会（指揮：長田 雅人）

2006年11月19日、オーチャードホール（東京）
において、この曲が演奏されていることがわかりました。

そのため、パンフレット・リーフレットにおける「日本初演」の表記を、「関西初演」と訂正
させていただきますよう、よろしくお願いいたします。

パンフレットの訂正

出演者名簿に **Bratsche 上田 秀樹（客演）** を追加してください。

2009年6月7日 京都フィロムジカ管弦楽団・印刷係